

# 説明的文章の読みの行動

## —中学校2年生に対する調査による分析—

間瀬茂夫  
(広島大学大学院)

### I 研究の目的

文章理解研究は、文章理解の過程には二つの異なる性質の過程があることを明らかにしている。すなわち、〈スキル〉としての読みの過程と、〈方略〉による読みの過程である。これら二つの過程は、次のような点から対比的にとらえられる<sup>1</sup>。

- (1)意図性
- (2)認知的洗練さ
- (3)柔軟性
- (4)意識性

〈スキル〉による過程が、固定的な手順による自動化された無意識的な過程であるのに対し、〈方略〉による過程は、文章の種類や場面に応じて自らの読みの行動を意識的・意図的に選択し、推論的に文章を理解する過程であると考えられているのである。

こうした〈方略的読み〉においては、文章を読むという場面状況における文章を読むことの目的が重要な役割を果たす。どのような方略を用いるかは、目的によって制御され、最適なものが選択されるのである。したがって、〈方略的読み〉では、〈宣言的知識〉(～について知っている)と〈手続き的知識〉(～の仕方を知っている、～できる)に加えて、〈状況的知識〉すなわち、いつどのようなときに、どの方略を、どのように用いればよいかということについて知っているという知識の概念が提示され、その重要性が指摘されている<sup>2</sup>。

我が国の国語科における読みの指導では、目的に応じて文章を読むということは以前から重視されてきた。近年では、情報活用能力の育成の問題とも関連して議論される。しかし、読みの目的が読みの行動をどのように規定しているかという問題は、指導において重視されながらも、十分に議論され、明らかにされてきたとは言えない。

本研究では、自らの読みの行為に対し意識的になってきていると思われる中学校2年生に対する読みの調査により、中学校段階における説明的文章の読みの過程がどのようなものであるかを文章を読む目的という点から分析し、その特質を明らかにすることを目的とする。

### II 調査の目的および方法と処理の方法

#### 1 調査の目的および仮説の設定

本研究における調査の目的は二つある。一つは、中学校段階において、読みの目的によって説明的文章を読む過程にどのような違いが見られるかを明らかにすることである。もう一つは、一つ目とも関わって、中学校段階における説明的文章の読みの過程がどのようなものであるか、中学生がどのような読みの行動を取るかを実態的に明らかにすることである。そして、第一の目的に関しては、次のような仮説を立てた。

文章の理解は、言語的構造として表された文章をどのような表象として認知しているかということによって大きく二つに分けて考えられることがある。文章の言語的構造に近い形で存在するものと、言語的情報に含まれない読み手の既有的知識を積極的に用いた、したがって文章の言語的構造とは必ずしも一致しない、推論の働きによる表象とである。

文章理解において、これらは相互に関わって形成されるものであり、決して段階的なものではない。本研究では、このことをふまえながらも、こうした二つの表象のあり方にそった読みの行動のカテゴリーを仮に次のように設定した。〈文章構造に焦点を当てた読み〉と〈推論的な読み〉とである。そして、それぞれの読みを促すような読みの目的を二つの群に与え、その目的の違いによって、その後読む説明的文章の読みの過程に違いが見られるかを分析した。

## 2 調査の対象と日時

〈文章構造に焦点をあてた読み〉の目的群（以下、文章重視群とする）については、広島大学附属中学校2年B組を対象として、1993年9月30日に調査を行った。〈推論的な読み〉の目的群（推論重視群とする）については、同2年C組を対象とし、1993年9月26日に実施した。

## 3 調査の方法

### (1) 教材

河合雅雄稿「若者が文化を創造する」（学校図書「中学校国語2」平成4年検定済）

### (2) 読みの目的の設定

学習者には、調査のはじめに、調査用紙の表紙に次のように記して、調査の目的を説明した。

この調査は、人が文章を読むときに心の中でどのような活動をしているかということを探るためのものです。

続いて、調査用紙に従って、両群に対しそれぞれの文章を読む目的を設定した。文章重視群に対しては、次のような調査のやり方の説明を読ませることで文章に焦点を置いた読みの目的を設定した。

#### I やり方

① 次の文章は「若者が文化を創造する」という題で書かれたものです。これからこの文章を読んでもらいますが、全部読んだ後で、文章に書かれていたことについて問う質問をします。質問に答えられるように文章を読んでいってください。

推論重視群に対しては、次のような問いに答えさせる過程で、推論を促す読みの目的を設定した。

I 次の言葉について後の質問に答えてください。

若者が文化を創造する

① 「若者が文化を創造する」という言葉について、思ったことを書いてください。

② 「若者が文化を創造する」という言葉について、あなたが思ったことを次の中から選ぶとすればどれですか。AからDの記号を丸で囲んでください。（複数でも可）

A 本当にそうなの？ 文化の創造なんて若者にできるの？

B うん、うん、確かにそうだ。言われてみればその通りだ。

C ここで言う文化って何だろう？ 若者どんな心が文化を創造するんだろう？ 文化の創造ってだれにでもできるの？

D その他

③ 次の文章は、「若者が文化を創造する」という題で書かれた文章です。あなたは、この文章を読んでどんなことを知りたい、考えたいと思いますか。あなたが知りたい、考えたいと思うことを深めるために次の文章を読んでいってください。

### (3) 調査用紙の記述

読みの過程において心の中でどのような読みの行為を行っているかをとらえるために、「若者が文化を創造する」の文章構成を表1のようにとらえ、これにしたがって4カ所について、学習者が文章を読んでいる過程において心の中で思ったこと、考えたことを自由に記述させるという方法をとった。実際には、それぞれの読みの目的を設定した後、続いて文章を読みながら行う作業について、次のように調査用紙に記した説明を読み上げることによって、両群とも同じように説明した。

- ②文章は六つに区切ってあり、順番に読んでいきます。  
 ③途中、文章の下に枠があるところが四ヶ所あります。ここでは、文章を読んであなたが心の中で考えたこと(あなたの心の動き)をできるだけ詳しくたくさん書いてください。  
 ※消しゴムは使わないでください。訂正は二重線でしてください。  
 ④行の間や余白にメモや書き込みをしてもかまいません。  
 ⑤途中、指示があるまで次のページを開かないでください。  
 (〈文章基盤の読み目的群〉の調査用紙から引用。〈知識基盤の読み目的群〉では、番号を③から⑥と付した。)

なお、文章を読んでいるときに心の中で考えたことを声に出して語らせる方法(発話思考法)<sup>3</sup>については、その有効性と可能性を認めつつも、調査の期間や手続きなどの問題から、この方法を採用することが出来なかった。

【表1】「若者が文化を創造する」の文章構成

| 段落          | 段落の要点                 | 各形式段落の要点   | 記述箇所 |
|-------------|-----------------------|--|------|
| 題名          | 若者が文化を創造する            |  | ×    |
| ①<br> <br>③ | 高等動物の行動の自由さと文化の関係     | ①動物と自然の関係<br>②高等動物の行動の自由さ<br>③個体により送出された行動が文化の母体                             | (1)  |
| ④<br> <br>⑧ | サルの文化の存在              | ④⑤サルの群による食物の違いの存在<br>⑥それは文化現象である<br>⑦⑧人間の食文化の例との比較(共通性)                      | ×    |
| ⑨<br> <br>⑪ | 文化の定義と文化の形成過程の説明      | ⑨進化史という文化概念の定義の観点の設定<br>⑩文化概念の定義と文化形成過程の具体的な説明<br>⑪幸島のサルの新しい食文化の形成の可能性       | (2)  |
| ⑬<br> <br>⑮ | 新文化の成立と新文化を分有しないサルの存在 | ⑬幸島のサルのイモ洗い文化の形成<br>⑭イモ洗い文化を分有しないサルの存在<br>⑮海へ入る新文化の形成<br>⑯海へ入る文化を分有しないサルへの実験 | ×    |
| ⑰<br> <br>⑱ | 文化の創造力のみならず           | ⑰文化の創造力は思考の柔軟さで<br>⑱文化創造のリスク(危険性)<br>⑲文化創造の意義                                | (3)  |
| ⑲<br> <br>⑳ | 人間社会での大人と若者の望ましい関係    | ⑲若ザルと老ザルの関係構図の人間社会への適用<br>⑳相互理解の土俵は柔軟性<br>㉑若者の冒険心の重要性と特権                     | (4)  |

※ ○の数字は、段落の番号を表し、間瀬が付した。

(4) 事後テスト

作業の後の事後テストによって、読みの目的の違いによる文章の理解度の違いを検証する予定であったが、調査の時間の都合によって実施できなかった。

(5) 文章を読むことに対するメタ認知的知識の調査

記述作業の後、文章を読むということを学習者自身がどのように自覚しているかを調べるため、次のような質問を行い、やはり自由に記述させた。

Ⅲ 次の質問に答えてください。

- ①あなたは文章を読むとはどういうことだと考えていますか。
- ②あなたはどんなことに気をつけて文章を読みますか

4 処理の方法

調査によって得られた読みの反応は、一文あるいはいくつかの文のまとまりや節を一つの単位とし、得られた読みの反応とともに表2に示したようなカテゴリーによって分類した。この表の分類の項目は、次のような構造を持つものと考えた。

文章の理解は、例えば「要約する」とか「一般化する」といった読みの行動によって言語記号が表象される。表象を形成することが表における〈理解〉である。〈理解〉を行うときには、そうした読みの行動がうまくいっているかを自分自身で判断し、調整しなければならない。その働きが、〈モニター〉である。これらの過程では、得られた表象やまた読む行為自体に対して、おもしろいとかつまらないというように〈評価〉したり〈感情〉を抱いたりする。文章の理解は、このような大きくは三つに分けられる働きが相互に関わって進む過程であると考えられる。

さらに、「調査の目的と仮説の設定」において述べたような〈理解〉のあり方の違いを軸に考えた場合、これらの三つの読みの働きにはいくつかの相があると考えられる。それを表2では、0から6の数字の系列によって表した。

1の系列は、前述したように文章に言語的な構造として表されたものに焦点を当てた読みの反応である。ここには、単語の意味の理解や段落の要約といった行為にまつわるものが分類される。2の系列は、同じように文章構造に焦点を当てながら、文章を題名と関連づけたり段落同士の関係を把握したりというように、文章内の情報の一貫性を保とうとするものである。これらを合わせて〈文章構造焦点化の読み〉とした。

3と4の系列は、〈推論的な読み〉とした。3の系列は、読み手の既有知識を積極的に用いて、文章に言語的構造として表現されていないことも推論的に理解するものである。ここでは、原因の推論や具体化・一般化が行われ、文章に書かれていることの意味だけでなく、読み手の世界と文章世界とを調和することも行われる。そうした読み手の世界観と文章に書かれていることとの整合性を保とうとする読みを4の系列とした。ここには、知らなかったことを受け入れることなども〈理解〉として含めた。しかし、文章の表現内容への反論は、〈評価〉とした。

5の系列は、筆者への反応である。文章の理解の場合、筆者のことを考慮することなく、意味を理解することができるが、実際には、筆者を想定しようとする行為が見られる。また、筆者をどのような人物として理解するかは、文章の表現内容の理解にも影響を及ぼしている。6の系列は、読み手の文章の読み手として自分自身への反応や文章を読む状況に対する反応が分類されるものである。読みの目的を把握することなどがここに入る。しかし、文章の表現内容を自分自身や自分の家族の状況などに当てはめて考えることは、3の系列とした。

0の系列は、以上のすべてを含んだような全体的な反応の系列である。

以上のようなカテゴリーによって、稿者自身が分類を行った。

【表2】読みの反応の分類カテゴリーと反応例 (○の番号は記入箇所を表す。)

|                     | 観点                   | 理解 R   | モニター M  | 評価・感情 E   |
|---------------------|----------------------|--|---|---|
| 全体<br>O             | 0 文章への全体的な反応         |  | ②時間がたてば納得ができるけれども初めはよくわからなかった。④結局何がしたいのかいま一つ理解できない。   | ①むずかしい ②おもしろい文章だと思った。 ③じゃけどうしたん。 ③りっぱな文章だと思った。  |
| 文章構造<br>焦点化の読み<br>T | 1 文章構造に焦点を置く反応       | ①分からないけどだいたいこういう意味だろう “学習することによって自由度が大きくなった行動が文化のもとになる”<br>①個体が創り出す行動が文化の母体になる。  | ②包括の読み方がわからない<br>①生得的の意味がわからない<br>②とくにわからないのは8ページの一行目から三行目です。<br>①「文化」の意味がよく分かった。                 | ①当たり前前の事をすごい難しい言葉を使っている ②こんなに分からない言葉があったにもかかわらず私が理解できたのは著者の文章の構成や言葉の使い方がうまいからだろうなと思った                   |
|                     | 2 文章の一貫性への反応         | ③「若者が文化を創造する」という題があったがこの文はその題そのものがふくまれている(その通りの文)だと思った。                          | ②この文章には題の若者という言葉がなくてどう関連しているのかよくわからない<br>③最初に人間は特別だとか書いてなかったかな<br>③このことまでよんで若者が文化をうみだすといういみがわかった。 | ③あの題では絶対にこの内容は予想できないと思う。  |
| 推論的な読み<br>K         | 3 推論に焦点を置く反応         | ②ほくたちの祖先も群をつくっていたにちがいない。だから今のほくたちの食習慣はこのサルたちと同じようにして定着したのだと思う。<br>④私の家もそんな感じですよ。 | ①「創出された行動」とは具体的にどんな行動か②幸烏ってどこ?③サル以外でもこういう事はあるのかな?④アライグマはどうやってものをあらいはじめたのか                         | ②文化のおこりって何てそっけないんだろう ②一人がやるとみんながやり出す行動はみにくい行動だと思う。④私は古いききたりを守るサルと新しい行動を開発する方が好きだと思う                     |
|                     | 4 読み手の知識推論との一貫性を保つ反応 | ②貝食文化の話しはなるほどと思った。<br>④人間とサルはそんなに違わないと思っていたが一つ大きな違いが分かった。                        | ①自然の中に生まれるのは、当たり前、他にどこで生まれることができるの?③サルと人間にこういう共通点があるとは思わなかった。<br>③筆者の代弁は少し間違っていると思う。              | ②この文章中にある「食文化」は文化よりはただの習慣に近いのではないのでしょうか。理由は一人が始めてそれが広まっただけだと思うからです<br>④前のページで自分が書いたのと似ている部分があったのでうれしかった |
| 状況焦点化の読み<br>S       | 5 筆者の状況に焦点を置く反応      | ①また最初に読み始めた時は、羨しそうな人が書いたような文章で現実そのものを想像以上に軽しく書いたような感じがした<br>④河合さんはサルを好きなんだと思う。   | ①河合さんは何を考えながらこんなことを書いているのだろうか。②魚食文化が群れに定着するのになんで大変興味があるのか。  | ①えっらそうに<br>②これを調べた人はよく調べたな<br>④ムかつくじゃない<br>④この作者はととてもすばらしい人だ  |
|                     | 6 読みの状況に焦点を置く反応      | ④私が文章を読んでいる時に思うことって、作者に対する反応ばかりだな、と思った。(きらいな文章の場合)                               | ①ナンデコンナコトセンニヤイケンノカ?<br>①「動物」という者を客観的に見ている。<br>②何を書いていいかわからん                                       | ①読むのが、めんどくさい。<br>①この先読んでみたくない。<br>③たまにはこんな授業もいいと思った(緊張感がある)<br>④つかれた                                    |

【表3】分類の結果1

|     | 文章重視群 |       | 推論重視群 |        | 合計   |        |
|-----|-------|-------|-------|--------|------|--------|
| 0系列 | 30    | 6.6%  | 27    | 4.5%   | 57   | 5.4%   |
| 1系列 | 101   | 22.3% | 114   | 19.0%  | 215  | 20.4%  |
| 2系列 | 11    | 2.4%  | 45    | 7.5%   | 56   | 5.3%   |
| 3系列 | 203   | 44.8% | 252   | 41.9%  | 455  | 43.2%  |
| 4系列 | 64    | 14.1% | 127   | 21.1%  | 191  | 18.1%  |
| 5系列 | 31    | 6.8%  | 26    | 4.3%   | 57   | 5.4%   |
| 6系列 | 13    | 2.9%  | 10    | 1.7%   | 23   | 2.2%   |
| 合計  | 453   | 99.9% | 601   | 100.0% | 1054 | 100.0% |

### Ⅲ 調査および処理の結果と考察

#### 1 読みの目的と行動との関わり

前節で概観した調査の過程において設定した読みの目的と、それ以降の文章を読む過程における読みの行動との関わりに関しては、表3のような結果を得た。この結果について、 $\chi^2$ 検定を行ったところ、読みの目的によって、文章に焦点を当てた読みの行動と推論的な読みの行動のどちらを多く取るかということに関して、両群の間に有意な差はなかった ( $\chi^2(6)=8.43, P>.10$ )。

このような結果について、考察を行うに当たって、まず、調査の設計における問題について述べておかなければならない。一つには、先に概観したような調査用紙による読みの目的の設定は、その後の読みの行動を制御するためのものとしては、十分なものではなかったということである。また、「心の中で思ったことを書く」という調査の作業状況が学習者にとっての読みの目的となっていたことも考えられる。したがって、「心の中で思ったこと」すなわち推論的な読みや感情や評価の反応が多くなったと推察されるのである。

しかし、こうした調査上の問題点を考え合わせても、中学生における読みの目的と読みの行動との関わりにはなお問題があると思われる。それは、学習者が文章を読む目的について、十分に意識していないということである。これは、分類の6の系列の反応（読みの状況に焦点を置いた反応）が、ほとんど見られないことによって明らかである（全体で2.2%）。わずかに見られる6の系列の反応は、文章を読まなければならないという課題状況に対する不満がほとんどで、文章を読む目的について調査用紙に記している者はいなかった。

自立した読み手を育てるといふ読みの指導の目標から考えると、漠然と無意識的に文章を読むのではなく、その文章を読む目的を自覚し、その目的によって文章を読む過程を意識的に制御することができるようにすることが重要である。したがって、読みの指導においては、ある特定の読みの行動を取ることを教師が指示するだけでなく、それぞれの読みの活動状況において、何が目的かを自覚化させ、その目的によさわしい読みの行動を学習者自身に選択させるような指導が必要であると思われる。

【表4】分類の結果2

| 分類 |    | 1   |        | 2   |       | 3   |        | 4   |       | 合計   |        |
|----|----|-----|--------|-----|-------|-----|--------|-----|-------|------|--------|
| O  | R0 | 0   | 0.0%   | 0   | 0.0%  | 0   | 0.0%   | 0   | 0.0%  | 0    | 0.0%   |
| T  | R1 | 18  | 6.8%   | 11  | 3.8%  | 5   | 1.9%   | 12  | 5.1%  | 46   | 4.4%   |
|    | R2 | 2   | 0.8%   | 8   | 2.7%  | 10  | 3.8%   | 2   | 0.8%  | 22   | 2.1%   |
| K  | R3 | 27  | 10.2%  | 74  | 25.3% | 108 | 41.5%  | 68  | 28.8% | 277  | 26.3%  |
|    | R4 | 9   | 3.4%   | 17  | 5.8%  | 6   | 2.3%   | 32  | 13.6% | 64   | 6.1%   |
| S  | R5 | 5   | 1.9%   | 2   | 0.7%  | 2   | 0.8%   | 13  | 5.5%  | 22   | 2.1%   |
|    | R6 | 1   | 0.4%   | 1   | 0.3%  | 1   | 0.4%   | 1   | 0.4%  | 4    | 0.4%   |
| O  | M0 | 20  | 7.5%   | 4   | 1.4%  | 0   | 0.0%   | 2   | 0.8%  | 26   | 2.5%   |
| T  | M1 | 46  | 17.3%  | 35  | 12.0% | 5   | 1.9%   | 1   | 0.4%  | 87   | 8.3%   |
|    | M2 | 7   | 2.6%   | 15  | 5.1%  | 11  | 4.2%   | 0   | 0.0%  | 33   | 3.1%   |
| K  | M3 | 17  | 6.4%   | 22  | 7.5%  | 15  | 5.1%   | 5   | 2.1%  | 59   | 5.6%   |
|    | M4 | 23  | 8.6%   | 12  | 4.1%  | 9   | 3.5%   | 16  | 6.8%  | 60   | 5.7%   |
| S  | M5 | 5   | 1.9%   | 0   | 0.0%  | 2   | 0.8%   | 1   | 0.4%  | 8    | 0.8%   |
|    | M6 | 1   | 0.4%   | 1   | 0.3%  | 0   | 0.0%   | 0   | 0.0%  | 2    | 0.2%   |
| O  | E0 | 10  | 3.8%   | 11  | 3.8%  | 7   | 2.7%   | 3   | 1.3%  | 31   | 2.9%   |
| T  | E1 | 42  | 15.8%  | 19  | 6.5%  | 8   | 3.1%   | 13  | 5.5%  | 82   | 7.8%   |
|    | E2 | 0   | 0.0%   | 0   | 0.0%  | 1   | 0.4%   | 0   | 0.0%  | 1    | 0.1%   |
| K  | E3 | 5   | 1.9%   | 32  | 11.0% | 59  | 22.7%  | 23  | 9.7%  | 119  | 11.3%  |
|    | E4 | 17  | 6.4%   | 15  | 5.1%  | 8   | 3.1%   | 27  | 11.4% | 67   | 6.4%   |
| S  | E5 | 7   | 2.6%   | 5   | 1.7%  | 0   | 0.0%   | 15  | 6.4%  | 27   | 2.6%   |
|    | E6 | 4   | 1.5%   | 8   | 2.7%  | 3   | 1.2%   | 2   | 0.8%  | 17   | 1.6%   |
| 合計 |    | 266 | 100.2% | 292 | 99.8% | 260 | 100.1% | 236 | 99.8% | 1054 | 100.0% |

※Oは〈全体〉、Tは〈文章構造焦点化の読み〉、Kは〈推論的な読み〉、Sは〈状況焦点化の読み〉をそれぞれ表し、表2と対応している。

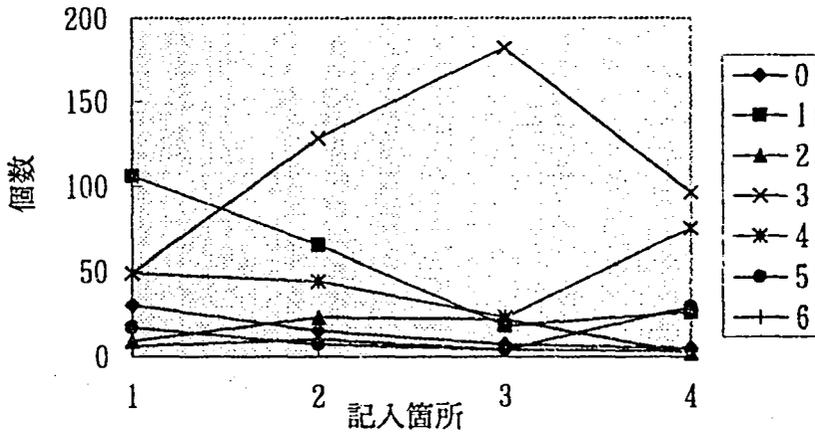
2 文章構造と読みの行動との関わり

調査用紙によって設定した読みの目的が直接的には中学生の読みの行動を制御していないとすれば、彼らの読みの行動を大きく支配していたものは何か。

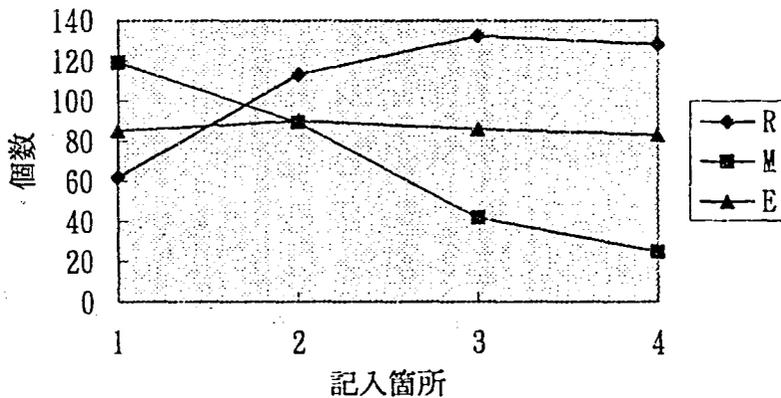
表4には、記入箇所の違いなわち文章構造あるいは文章の表現内容の違いによって、取られる読みの

行動にどのような違いが見られるかをとらえようとするものである。そして、この表を文章および時間の展開にしたがって表したものが、図1と図2のグラフである。これらの表とグラフから、文章構造と読みの行動との関わりについて、次のようなことが考えられる（なお、ここでは、文章重視群と推論重視群の間に有意な差が見られなかったことから、両群の間の区別はしない。集計もそのように行った。）。

【図1】 0123456系列のグラフ



【図2】 RME系列のグラフ



記入箇所(1)では、図1から、1の系列の反応、すなわち文章構造に焦点化した読みの多いことがわかる。図2を見ると、Mの系列、すなわちモニターの反応が多い。表4も合わせ見ると、Eの1すなわち文章構造に関する〈評価〉の反応が多い。これは、記入箇所(1)は、表1に文章構成を示したように具体例などのない抽象的な内容をもつ文章の部分であり、こうした文章構造に学習者の多くが反応したと考えられる。ここでは、難解な語句をわからないとしたり（モニター）、難しい言葉が多い（評価）といった反応が数多く見られた。

記入箇所(2)では、3の系列と、わずかではあるがRの系列がより多く見られる。この部分は、サルの

食文化の形成過程について具体的に説明した部分であり、そのサルを人間の文化に一般化して推論する反応や人間とサルの共通性を指摘する反応（いずれもR3）などが多くなっているのである。

また、ここでは、記入箇所(1)とは対比的に、わかりやすいと評価している反応も多くみられる。2の系列がわずかではあるが増えているのは、題との一貫性を認める反応（M2）による。

記入箇所(3)においては、Rと3の系列が断然多くなる。ここは、アカキンといった名前を持つ老ザルや新しい行動を生み出す少年少女のサルが個性的な存在として登場する部分で、彼らの行動と自分自身や自分の家族とを結びつけて推論する反応（M3）が多くなっている。一方、具体的でわかりやすい内容であるため、モニターの反応（M）は、減っている。

なお、E〈評価・感情〉の反応は、記入箇所(1)から(4)に平均してみられる。これは、文章を読む過程において、これらの活動が、理解のあとに段階的にやってくるものではなく、常に理解に伴うものであることを示していると考えられる。

記入箇所(4)では、4の反応が増えている。これは、この部分が筆者の主張を述べている部分であり、この筆者の主張を納得したり（R4）、反論したり（E4）する反応が多かったためである。また、老ザルと若ザルの関係の構図を人間に当てはめていて、一般的な部分であるためか、R3の反応は相変わらず多いとはいっても、急減している。5の系列すなわち筆者への反応がわずかながら増えたのは、最後に筆者の紹介のあることと、この部分に筆者の主張が表れていることによると考えられる。

このように見てくると、学習者の読みの行動を規定している要因としてもっとも大きいのは、文章構造にあると言える。文章は読み手を主体化する仕掛けとなっていると考えられる。これを読みの目的という点からとらえると、文章は読み手にその文章を読むこと自体を目的とさせるような仕組みを備えていると考えられる。

読むという行為において、読み手は、何らかの目的を持ってその文章を読む。しかし、文章を読む過程は、その目的によってだけでなく、文章を読む過程において生まれてくる目的によってもまた規定されている。

【表5】文章を読むことに関するメタ認知的知識

| 分類  | 項目               | 数(計63) |       |
|-----|------------------|--------|-------|
| 文章外 | 楽しむ、ひまつぶし        | 7      | 11.1% |
| 文章内 | 知識、情報を得る         | 15     | 23.8% |
|     | 自分の考えを深める        | 14     | 22.2% |
| 能力  | 学力               | 4      | 6.3%  |
|     | 感情、想像力を豊かに       | 3      | 4.8%  |
| 何を  | 内容、筆者の言いたいことへの理解 | 16     | 25.4% |
| その他 | ジャンルにより異なる       | 4      | 6.3%  |

### 3 読むことに関するメタ認知的知識と読みの行動との関わり

調査用紙のⅢにおいて行った調査から、学習者が文章を読むということをもどのように自覚しているかということのについて表5のような結果を得た。この結果から、メタ認知的知識と読みの行動との関わりについて統計的に分析することはできない。ここでは、二人の学習者の反応を具体的に引き上げて、事例的な考察を行う。

ある学習者は、文章を読むということについて（調査問題Ⅲの①のみ）、次のように答えている。

人の考えなどを自分のものにしたり理解してまた別の意見を持つ。  
この学習者は、こう答える以前の読みの作業では次のような反応を示している。

記入箇所(1)

この文章には題の若者という言葉がなくてどう関連しているのかよく分からない。それから創出された行動というものは文化の母体であるを書いてあるが、ほくは文化とは生活の中で必要であつたりまたもっともよいものである必要があつたりしたときそれは自然に生まれると思う。

記入箇所(2)

最初の方にニホンザルがマサキの木を食べる食べないとか書いてあつたがそれはほかに食べるものがないとか、それ以外に充分食物があるからではないだろうか。それを食文化というのだろうか。

記入箇所(3)

文化はしきたりであるように書いてあるが本当にそうなのだろうか。文化というものはこれと言つてはっきりと定められたものではないと思う。文化はここでは子ザルたちが発展していったりするものでそうすることはけつして文化をやぶるものではない。

記入箇所(4)

人間とサルはそんなに違わないと思つていたが一つ大きな違いが分かつた。

これらの反応は、前節の分類(表2)においてE4あるいはM4に分類されるものがほとんどである。読むことに関するメタ認知的知識の調査は、読みの反応の記入作業の後に実施したことの影響も十分考えられるが、この事例は、読むことに関する学習者のメタ認知的知識が、読みの過程を規定する要因になっていると考える根拠になると思われる。

また、他の学習者は、同じく事後の調査Ⅲの問いに対して、次のように答えている。

①問題をとく。

②例などをまとめた一つの言葉を見つけること。

①は、文章を読むことに関する問いに対する回答であり、②は、文章を読むときに気を付けていることを尋ねた問いに対するそれである。そして、この学習者は、前の作業において、次のような反応を見せている。

記入箇所(1)

なんや、これ。若者が文化を創造するんだと思つた。個体が創り出す行動文化の母体になる。

記入箇所(2)

食物文化 魚食文化 卵食文化 乳酪文化 貝食文化 創出、行動

記入箇所(3)

いも洗いやムギ洗いなどの文化的行動。

記入箇所(4)

冒険心

この反応は、読むことに関するメタ認知的知識(特に②の問いの回答)と読みの過程との端的な一致を示している。

これらの事例は、中学校2年生段階において、文章を読むことに関する読み手のメタ認知的知識が、読みの過程に大きな影響を及ぼしていることをうかがわせるものである。読みの指導において、文章を読むことをどのようなものとしてとらえるかということに対する指導の必要性が示唆される。また、読みの目的という点において、文章を読む目的が、ある文章を読む状況によって設定される目的、そして、読みながら文章構造に大きく影響されて生み出される目的に加えて、それまでの自分自身の読みの経験によって持つ読みの目的という重層的な読みの目的構造の存在を示していると思われる。

以上のように、本稿では、読みの目的という観点から、説明的文章を読む過程がどのようなものであるかを考察してきた。その結果、文章を読む過程における目的が単一のものではなく、重層的な構造を持つものであり、そうした重層的な目的によって、読みの行動が規定されていることが明らかになった。今後

は、説明的文章の〈方略的読み〉の過程について、実験的な方法も用いながら、さらに解明していくことが課題となる。

—注—

1. Dole, J.A., Duffy, G.G., Roehler, L.R., & Pearson, P.D. (1991) Moving from the old to the new: Research on reading comprehension instruction. *Review of Educational Research*, 61, p.242.

2. Paris, S.G., Lipson, M.Y., & Wixson, K.K. (1983) Becoming a strategic reader. *Contemporary Educational Psychology*, 8, pp.93-316.

3. 茂呂雄二「語ること・語らせること」海保博之他編『プロトコル分析入門』新曜社, 1993年, p.16

#### 附記

調査にあたって、広島大学附属中・高等学校の佐々木秀穂先生と三根直美先生、生徒のみなさんには大変お世話になった。記して感謝を申し上げます。